

研究ノート

言語の外言と内言の育成に関する研究 —教科「日本語」の事例分析—

清水 洋一

SHIMIZU, Youichi

(東京都公立小学校 教諭)

0. 問題意識

情報化社会となり、インターネット、メールが普及する中で、言語の重要性が話題となることが多くなった。言語には力があるということが云われている。しかし、コピー＆ペーストに見られるように、簡単に文字を引用することができるので、自己の意志を伝えるというよりも表面的な書式スタイルを追求するあまり、自己の意志を適切に伝えることのない文章が増えてきた。つまり、形だけはよい文章が増えており、文章に味やリズムというようなものがなくなってきているということである。言語表現において自己表現がなく、文章そのものが人格を形成していないように思われる。

このような課題に対処するには、言語を自己形成や自己表現の手段として考え教育していかなければならない。

1. 分析概念—ピアジェとヴィゴツキーの論争—

教育心理学、発達心理学の分野では、言語の獲得として内言、外言という専門用語が使われることがある。内言とは、音声を伴わない自分自身のための言語であり、思考時に使用される。一方、外言とは音声言語であり伝達の機能を果たす（ヴィゴツキー、L.S、2001 柴田、2006）。

ピアジェは、自己中心的な言語が次第に社会化されていく中で、他者への伝達を目的とした社会的言語が発達するとし、「自己中心的な発話」から「社会的言語」へと進んでいくとした。これに対し、ヴィゴツキーは、課題解決中に子どもの独り言が増加することに注目し、内的発話を内言とした。ヴィゴツキーは、ピアジェの提唱する「自己中心的発話」もこの思考の道具としての内言であるとし、他者とのコミュニケーションのために発せられる言葉を外言としている（ヴィゴツキー、L.S、2001 柴田、2006）。本論文では、このような言葉の特質に着目して、世田谷区教育特区の教科「日本語」の事例を中心に、言語教育における外言と内言の育成の方策や課題等について分析していく。

2. 世田谷区における教科「日本語」の取組み

2.1 教育特区としての概要と経緯

世田谷区では、「深く考える子どもを育成する」、「自分を表現することができ、コミュニ

ケーションができる子どもを育成する」、「日本の文化を理解し大切にする子どもを育成する」という、3つのねらいのもと、「美しい日本語を世田谷の学校から」と題した取り組みを平成15年度から取り組んでいる（世田谷区ホームページ 2010）。そして、その取り組みをさらに深化させるために、平成16年12月に内閣府より「世田谷『日本語』教育特区」の認定を受け、平成19年度より区立全小・中学校において特別な教育課程を編成した教育活動を展開している。

世田谷区は平成16年12月に構造改革特区「世田谷『日本語』教育特区」に認定されましたが、特区に認定された施策は、十分な効果をあげたと国で認められた場合、その特例措置が、全国のどの自治体等でも実施可能になる（世田谷区ホームページ 2010）。

「世田谷『日本語』教育特区」については、全国で展開するにふさわしい特区であると国から認められ、教科「日本語」は全国どの自治体や学校でも実施できることとなった。

なお、世田谷区については、「世田谷区『日本語』教育特区」に認定されていたところから、文部科学省の告示により自動的に文部科学省の指定自治体になっている。

2.2 教科「日本語」のねらいと内容

世田谷区では、「美しい日本語を世田谷の学校から」と題した取り組みを平成15年度から取り組んでいる。

小学校では、週に1時間の授業を行い、短歌、俳句、古文、漢詩、論語、近代詩などを音読したり、暗唱したりする活動を通して、日本語の美しい響きやリズムを楽しむ学習を行っている。また、地域に伝わる民話や世田谷区の地名の由来や、日本の伝統文化などについて学んだり、調べたりする活動を行っている。

中学校では、週に1～2時間の授業を行い、教科「日本語」の3つのねらい応じて、次の3つの領域を設置している。

（1）深く考える能力・態度を育成することを中心とする「哲学」領域、（2）自己の考えや思いを表現し、コミュニケーション能力を育成することを中心とする「表現」領域、（3）日本文化を理解し、継承しようとする態度を育成することを中心とする「日本文化」領域である。

3. 事例分析

3.1 外言から内言を育成する授業

3.1.1 教材と授業に対しての考え方

本単元は、平成21年9月30日に行われた3年3組の「世田谷カルタ」の授業である。

世田谷区の各地域や自分の住んでいる地域の地名の由来などを知り、地域の昔のことや、人々の思いを理解させ、昔から伝えられてきた文化を感じさせることをねらいとしている。学習対象者は、中学年であり、3年生が中心となっている。

3年生では、社会の授業が始まり、自分の住んでいる地域や世田谷区のことについて学んでいる。地域めぐりや町探検を通して地域の様子を知り、世田谷区や自分の住む地域に親しんでいる。また、世田谷区で行われている各行事を紹介し、夏休み等の休日を利用して行事に参加し、より地域のことを知り、親しむということを学習している。

教科「日本語」のカリキュラムの10の柱の中には、「郷土に伝わる文化を知る」「自分の言葉で表現する力を身につける」がある。地域の名前の由来や行事等を調べる活動を通して、「郷土に伝わる文化を知る」ことの大切さや郷土カルタ作りでは、社会科での学習を生かし地域の様子や行事等について調べ、七五調などを用いて調べたことや体験したことをカルタに表し、「自分の言葉で表現する力を身につける」ことをねらいの一つとしている。自分の作ったカルタを発表し合う活動を通して、一人一人の思いや経験により様々な表現の仕方があることに気づくことができる。

教師が行う教材分析では、世田谷区の地域の由来を分析している。以下が地名の由来表である。

地域名	名前の由来
松原	世田谷城主の吉良氏の家臣であった松原氏の3人の兄弟たちが松原宿を開き、このあたりが開墾され、「松原」という地名がついた。
世田谷	平安時代に「勢田郷」という地名があり、勢田郷の谷の多いところを勢田峽と呼び「峽」が同じ意味の「谷」に変わって、「世田谷」になったという説がある。
等々力	等々力溪谷周辺の崖では、滝ができた崩れたり繰り返され、その音がとどろくことから、地名ができたという説がある。
烏山	耕作地を山と言っていた。また、農業をする人々にとって身近な土の色が黒かったことから、「烏」という字を当てたという説がある。
砧	「砧」とは、小槌で布を打って柔らかくしたり、つやを出したりするときに用いる台のこと。多摩川の川原のあちらこちらで、砧を打つ音が聞こえたという説がある。

また、世田谷の郷土に伝わる文化も分析の対象となっている。

地名	自然	行事	施設（橋・公園・通り）
喜多見	畑（野菜）・田（米作り）	ふるさと区民祭り	馬事公苑・雁追橋
二子玉川	野鳥・昆虫・魚	喜多見の須賀神社湯花神事	次太夫堀公園・水道道路
成城学園	草花や樹木	浄真寺お面かぶり	世田谷通り・公園
砧	川（多摩川・野川）	多摩川の花火大会	
等々力	等々力溪谷	氷川神社の節分祭	

3.1.2 授業展開

本授業前には、3 時間行われた。1 時間目には、世田谷区の中で知っている地名を発表させ、2 時間目には、世田谷区の地名、通り、橋、公園、行事、学校の名前の由来について調べたことを発表させた。また、カルタの響きやリズム等について指導した。3 時間目には、「世田谷郷土カルタ」を参考にして、自分の体験や調べたことをもとに世田谷郷土カルタを作るということをした。

本授業では、まず前時間までの学習の確認をし、教師が拡大したカルタを掲示し、教科書の作品を一斉読みした。そして、授業のめあて「自分のカルタを作ったきっかけやその時の様子をもとに発表しよう」を確認した。

次に、グループに別れ、自分の作ったカルタを発表した。グループは、4－5 人であり、カルタの読み札を発表するだけではなく、作るに至ったきっかけや、その時の様子を意識して発表させるようにした。そのために、カードを発表する時には、①二回読む、②きっかけやその時の様子を話す、③グループ全員で読む、④意見や感想を話す、という型を指導した。

第三の活動は、グループ内で発表し合った中から、全体に紹介したいカルタを選び、発表した。地名、自然、行事、施設などの様々な分野から紹介するようにした。発表されたカルタを全体で声にだして読み、響きを味わうようにした。

最後に、これから行われる地域行事について話し合った。地域行事については、区民まつり、ポロ市、氷川神社の節分祭等について話し合われた。

3.1.3 考察－外言から内言へ－

ヴィゴツキーは、子どもの思考と言語の発達における「内言」の発達と役割を重視した。子どもは、幼児期が進むとともに、大人と（あるいは子ども同士で）「しゃべる・話す」という経験を蓄積していく（塩田・青柳、2009）。自分の外側に向けてしゃべる・話すという意味で「しゃべる・話す」とは即ち「外言」である。子どもは他者に向けてしゃべる・話すこと（外言）を重ねることで、次第に自分に向けてしゃべる・話す（内言）が出来るようになっていく。即ち、外言の経験が内言を生み出すといえる。また、外言から内言への移行期（過渡期）には「独り言・ささやき」が生まれる。難しい問題（課題）を解決しなければならなくなった時など、この移行期にある子どもは、ぶつぶつと自分に向けて独り言を言いながら、思考しているわけである。そして、この独り言がさらに内化されて内言となる（塩田・青柳、2009）。

今回の研究授業でも外言から内言を育成する授業では、発表するということが中心である。言語を外に押し出すことにより、「言語感覚」を身につけていく。

言語を入力もすることもあるが、あくまで出力、つまり発表を中心として、作文、詩、短歌、俳句などを音読発表させ、意見交換を行っていく。

相手にどのようなことばを伝えるのか、というよりも大事なことは、子どもたちが、どのようなことばを発し、自分の中、つまり自己対話をするのか、ということである。

この授業型には課題もある。発表するだけで、議論、話し合いというものがより発展することが難しいということである。言いつばなしになってしまい、発表するだけで自己満足を得られるというだけになってしまい、内言の育成に繋がらない恐れがある。

3.2 内言から外言を育成する授業

3.2.1 教材と授業に対する考え方

本単元は、平成19年11月27日に行われた3年1組の「論語」の授業である。

論語を教材に取り上げた授業では、論語を音読したり、暗誦したりすることを通して、ことばの響きやリズムを楽しむこと、を目標としている。

論語は、孔子の言行や門人たちとの問答などを集めたものであり、弟子たちの手により編纂されたものである。また、論語は、孔子思想を知るうえで最も重要な書であり、我が国にも影響を与えた。「仁」とは、人間を愛すること。自分に対しては「忠」（まごころ・心に忠実であること）、他人に対して「恕」（思いやり）、であるということである。本授業で学習する論語は「子曰、巧言令色鮮仁」は「口がうまくうわべだけかざる人は、まごころがありません。」という意味であり、この仁の大切さが色濃く出された論語の一つである。この教材を繰り返し音読することにより、言葉の響きやリズムを感じ取り、声に出してすらすら読めることの楽しさを実感してほしいと考えている。

3.2.2 授業展開

本授業の前には漢詩が4時間行われており、季節に準拠した詩を学習している。授業は、まず、発声練習から始められた。口の形や声の大きさを意識して読むようにめあてが教師により示された。

次に教師の読みを聞き、全体や少人数で音読をした。なるべく、列読み、男女別読み、グループ読みなどを取り入れ、音読の回数を増やしていった。そして慣れてきたら教科書を閉じさせ、作品を暗唱できた子供を称賛した。

第三に、論語の意味や孔子について教師が説明した。孔子の絵を掲示したり、日本人に与えた影響についても説明したりした。

最後に、今までの音読や説明を土台にして自分なりに工夫して、声に出して一人で読んだ。

3.2.3 考察－内言から外言へ－

内言の発達により、子どもは頭の中で、思考することが可能になる（塩田・青柳、2009）。また、ヴィゴツキーは「書きことばは内言の後に、その存在を前提として現れる」とい

う。ヴィゴツキーは、「書きことば」を獲得するためには「二重の抽象—ことばの音声的側面と対話者の抽象」ができなければならないという。即ち、ことばを音声化せずに頭の中で使えることと、目の前の具体的な対話者に向けてではなくことばを使えることの2つの「抽象」が「書きことば」の条件であるという。そして、この2つは、共に内言の働きによる。

また、ヴィゴツキーは、ことば（あるいは思考）以前の心の領域（原想念）は内言により、伺い知ることができるという。ことば以前の、情動に根差した欲求・想い（原想念）は、まず内言によりことば化される。この意味で、内言により、私たちは自分の心を見つめ、またそれを表現していくための手がかりを与えられるといえる（塩田・青柳、2009）。

このように、内言は、心の中で思考し、また自分を見つめ、さらに文字によって表現する、という極めて重要な心の働きを担っている。

内言から外言を育成する授業では、「人格の完成」（心の変化）に着目している。大人でも難しい言語に接し、そして声に出したり、その情景を描いたりすることにより、自分の脳の中に響きやリズムとして蓄積され、内面化していく。

音読や情景描写もそれは上手く外に出すということが目的ではなく、あくまで内面化の証左として考えられている。しばしば、脳で理解するのではなく、身体で覚えるという格言があるが、内言は自分の中の思考のために身体、言語を使用している。

4. 総合考察

研究授業でも外言から内言を育成する授業では、発表するということが中心である。言語を外に押し出すことにより、「言語感覚」を身につけていく。言語を入力もすることもあるが、あくまで出力、つまり発表を中心として、作文、詩、短歌、俳句などを音読発表させ、意見交換を行っていく。

内言を育成する授業では、「人格の完成」（心の変化）に着目している。大人でも難しい言語に接し、そして声に出したり、その情景を描いたりすることにより、自分の脳の中に響きやリズムとして蓄積され、内面化の証左とされている。内面化には、意味を始めから無理に理解させるのではなく、身体の一部として脳を考え、響きやリズムを中心に学習活動を展開している。

各々の授業では、育成するものに論点を絞ると他の育成視点を見逃してしまうということになる。しかしながら、教師がこれらの授業の特質に気づくことで教科「日本語」の本質的な部分を理解し、「言葉の力を高め、深く考え、豊かに表現する児童を育てる」教育をすることができるようになると思う。

[文献リスト]

- ・塩田裕子・青柳宏（2009）「内言の充実と心の成長その 1」宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第 32 号 pp135-142
- ・塩田裕子・青柳宏（2009）「内言の充実と心の成長その 2」宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第 32 号 pp143-150
- ・柴田義松（2006）「ヴィゴツキー入門」子ども未来社
- ・世田谷区立喜多見小学校（2007）「言葉の力を高め 深く考え 豊かに表現する児童を育てる－教科「日本語」を通して」平成 19 年度研究収録
- ・世田谷区立喜多見小学校（2008）「言葉の力を高め 深く考え 豊かに表現する児童を育てる－教科「日本語」を通して」平成 20 年度研究収録
- ・世田谷区立喜多見小学校（2009）「言葉の力を高め 深く考え 豊かに表現する児童を育てる－教科「日本語」を通して」平成 21 年度研究収録
- ・世田谷区ホームページ <http://www.city.setagaya.tokyo.jp/030/d00020629.html>
- ・ヴィゴツキー、L.S（2001）「新訳版・思考と言語」訳柴田義松、新読社